

顕浄土真実行文類二(三)

高田短期大学学長 栗原廣海

一、称名は無明を破す

善導大師に導かれて説かれた法然上人の念仏往生の教えを、親鸞聖人は曇鸞大師の『浄土論註』の教説に基づいて、弥陀回向の「大行・大信」として展開され、大行を「無碍光如来の名を称するなり」と示されたのでした。そしてこの称名は、阿弥陀仏の大悲心から回向された行であって、凡夫が自らの意思で行う自力の行ではないことをあらわすとともに、その称名は第十七願によってこの私に届けられていることが、「行文類」冒頭の御自釈には述べられていたのです。

御自釈に続いて、大行が真実の行であることを、諸經典の引文をもって証明されます。具体的には、第十七願文とその成就文をはじめとする『無量寿

ち南無阿弥陀仏である。南無阿弥陀仏はすなわち信心である。このように知らなければならぬ。

この文は、曇鸞大師の『浄土論註』下巻の讚嘆門の、いわゆる名号破満の釈によっておられます。前回、聖人が「大行」について「無碍光如来の名を称するなり」と言われているのは、『浄土論註』の、「へかの如来の名を称す」とは、いわく、無碍光如来の名を称するなり」によっておられることを述べましたが、この文は、それを承けて述べられた中の、「へかの名義のごとく、如実に修行して相応せんと欲す」とは、かの無碍光如来の名号は、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまふ。(以下略)の文によっておられます。

では、「無明を破す」とはどういうことでしょうか。

経』の文、『無量寿経』の異訳である『無量寿如来会』『大阿弥陀経』『平等覚経』の文、そして『悲華経』の文ですが、これらの経文の考察はここでは控えたいと思います。

引文をとおしていよいよ明らかになった大行のはたきを次のように述べられます。

しかれば名を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満てたまう。称名はすなわちこれ最勝真妙の正業なり、正業すなわちこれ念仏なり、念仏すなわちこれ南無阿弥陀仏なり、南無阿弥陀仏すなわちこれ正念なりと、知るべしと。

(こういうわけであるから、弥陀の名号を称えるにおいて、そのはたらきは衆生のすべての無明を破り、衆生のすべての願いを満たしてくださる。称名はすなわち最もすぐれた、真実微妙な正定の業である。正定業はすなわち念仏である。念仏はすなわ

二、「無明を破す」ということ

世界宗教としての仏教にはさまざまなカテゴリーがあり、日本にもさまざまな宗派が存在して、生死出離の道はさまざまですが、いずれの仏教も、「無明を破する」ことを志向するという点で共通していると言っていえます。

「無明」とは、我々の存在の根底にある根本的な無知のことで、真理に暗いことを言います。十二因縁(縁起)では、苦をもたらす根本原因として第一に挙げられ、釈尊はこの無明を滅することによって生老病死などの一切の苦を滅し、さとりを得られたと言われています。

この無明は、釈尊入滅後の諸仏教ではさまざまに分類され、それぞれが微に入り細にわたって解説されることになりました。例えば、説一切有部や唯識宗(法相宗)では無明を「相応無明」と「不共無明」に分け、唯識宗では不共無明をさらに「恒行不共無明」と「独行不共無明」に分けて説明します。また、唯識宗では、無明を種子

と現行に分け、無明の種子を「随眠無明」、無明の現行を「纏無明」と呼んでいます。『大乘起信論』では、無明は不覚であるとし、この不覚を「根本無明」と「枝末無明」に分けています。天台宗では、空・仮・中の三観によってそれぞれ見思・塵沙・無明の三惑を断つとし、無明とは非有非空の理に迷い、中道を抑えるものとしています（以上、法蔵館刊行『仏教学辞典』参照）。

このように、無明の解釈・理解は煩瑣を極めませんが、つまるところ、無明とは、ものごとのありのままの真理に暗く、道理が分からない無知なあり方、つまり愚痴のことであると言うことができます。称名は、そんな無明を破ると言われているのであり、無明が破られた世界は、一切の迷いを離れ、真理に達したさとりの世界であると言えるでしょう。「よく衆生の一切の志願を満てたまう」とは、そのような世界を志向する衆生の一切の志願が満足されることが述べられていると言えるでしょう。

手に聖人がお使いになっていない文言を創出し、それによって解釈・理解に整合性をもたせようとするのは問題だと言えるのではないのでしょうか。無明が破られるとは、ものごとのありのままの真理に暗く、道理が分からない無知が破られることと言えるでしょう。

称名は衆生のすべての無明の闇を破り、衆生のすべての願いを満たしてくださるということ、宗学においては称名のはたらきを「破闇満願」または「称名破満」と言い習わしてきました。

三、最勝真妙の正業

そのようなはたらきをする「称名」ですから、それは「最勝真妙の正業」すなわち、間違いない往生成仏が決定する、最もすぐれた徳をもった行いであると言われます。善導大師は『観経疏』「散善義」に、

一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、
念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故（一

）ところで、宗学においては古来、無明について二種類の理解があるようです。一つは、右に述べたような理解で、それを「痴無明」と言います。もう一つは弥陀の本願を疑うことを言い、それを「疑無明」と言うのです。そして、ここで述べられている「無明」についても、痴無明説、疑無明説、両者併存説と、三種類の理解が存在するということですが。

無明が諸仏教のなかでさまざまに分類され、詳述されてきたことはすでに述べました。聖人もそれにならって、浄土門についての無明を新しい概念として考えられ、本来の無明の概念と区別して使っておられるのでしょうか。だとすれば、語義など緻密に考察される聖人におかれては、「痴無明」なり「疑無明」なりの文言を、聖人自身が考へ、名づけ、使用されたであろうと考えられます。聖人自身がそうはされなかつたということは、本来の意味とは異なった新しい概念で無明を語られたとは考えにくいと思うのです。後学のものが勝

心に弥陀の名号を専念して、行住坐臥に時節の久近を問わず、念念に捨てざるを、是を正定の業と名く。彼の仏の願に順ずるがゆえに。

と言われました。法然上人は『選択集』にこの文を引用なさるとともに、

問いていわく、なんがゆえぞ五種のなかに独り称名念仏をもって正定の業となすや。答えていわく、かの仏の願に順ずるがゆえに。意はいわく、称名念仏はこれかの仏の本願の行なり。ゆえにこれを修すれば、かの仏の願に乘じてかならず往生を得。

とおっしゃっています。これらによって聖人は称名を「最勝真妙の正業」とされたのでした。

そして、それは「念仏」であり、「念仏」とはすなわち「南無阿弥陀仏」であり、「南無阿弥陀仏」は私の心にはたらいって信心となりますから、それは「正念」であると言われているのです。